



# 日本イスペインヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第21号 (2014年10月11日) / Núm. 21 (11 de octubre, 2014)

## 事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1  
第2ユニオンビル4F  
(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内  
Tel:03-5981-9824 Fax:03-5981-9852  
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp  
(http://www.gakkai.ne.jp/ajh/)

## 広報委員会編集部

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1  
関西外国語大学  
田尻陽一研究室  
Tel:072-805-2801 (代表)  
e-mail: y-tajiri@kansai-gaidai.ac.jp

## 目次

### 【巻頭言】

木下 登 近づくサラマンカ大学創立 800 周年によせて…………… 2

### 【エッセイ】

1. 西川 喬 鼓直先生の叙勲について…………… 3
2. 野谷文昭 薄緑の街と詩人たち—世界詩人会議第6回大会—…………… 4
3. 野村竜仁 アドルフォ・ビオイ=カサーレス生誕百周年によせて…………… 6
4. 鼓 宗 スペインの未来主義—バセウルとアロマル…………… 7
5. 安保寛尚 2014年キューバ出張記…………… 8

### 【書 評】

1. 花方寿行 ロベルト・ボラーニョ『売女の人殺し』…………… 9
2. 高際裕哉 ロベルト・ボラーニョ『鼻持ちならないガウチョ』…………… 10
3. 大楠栄三 ホセ・ドノソ『別荘』…………… 12
4. 柳原孝敦 且 敬介『旅立つ理由』…………… 13
5. 田尻陽一 ティルソ・デ・モリーナ  
『セビーリャの色事師と石の招客』…………… 15

### 【劇 評】

斎藤文字 劇団クセック ACT『ラッパチーニの娘』…………… 16

### 【国際学会報告】

1. 福寫教隆 第2回イベロ・アジア・イスタニスタ会議…………… 17
2. 木下 登 II CONGRESO IBEROAMERICANO LEIBNIZ…………… 18
3. 岡本淳子 International Federation for Theatre Research…………… 19
4. Congreso Internacional sobre el español y la cultura hispánica en Japón  
ALFAL (Asociación de Lingüística y Filología de América Latina) …… 19

【『HISPANICA』 編集委員会より】…………… 20

【編集後記】…………… 20

## 【巻頭言】

### 近づくサラマンカ大学創立 800 周年によせて

木下 登

サラマンカは、マドリードの北西 200 キロほどのところに位置する中規模の地方都市だ。この町が世界的であるとすれば、それは 1218 年に創立されたサラマンカ大学の存在による。いまその大学が、中世以来の大学のモットー「あらゆる学問の教育で一番のサラマンカ」(Omniun scientiarum princeps Salmantica docet) を掲げ、創立 800 周年へと歴史的な歩みを進めている。

サラマンカ大学は、16 世紀にスペイン文化が黄金世紀を築いたとき、神学、法学、人文学の分野において大きな足跡を残した。コロンブスによってヨーロッパと新大陸が遭遇したことに端を発して、ビトリアをはじめとする神学者たちは、インディオ問題をめぐり普遍的な人権について議論を重ね、今日の国際法の基礎を築くに至った。一方、スペインが新大陸に建設していったものはカトリック教会と教育機関で、早くも 16 世紀半ばには、メキシコ、リマ、グアテマラの各都市にサラマンカ大学の教育課程に準じた大学が創立された。16 世紀から 19 世紀にかけて新大陸に設立された 30 以上のスペイン系大学の多くがサラマンカ大学をひな形とした。

サラマンカ大学の繁栄に先立って、スペインでは、コルドバやトレドをはじめとして、思想史の分野だけから見ても、その時代をリードする優れた学問の府が存在した。コルドバでは、セネカ、アヴェロエス、マイモニデスら哲学者が輩出した。ローマのセネカはキリスト教のストイシズムに大きな影響を与えたといわれる。12 世紀には、アヴェロエス、マイモニデスが信仰と理性の調和を探索した。トレドは、イスラーム教とキリスト教の文化が接する都市であり、多くの神学書や哲学書がアラビア語からラテン語へと翻訳され、その後、ヨーロッパの神学と哲学に大きな力を与えた。サラマンカ大学の 800 年にも及ぶ歴史は、ローマ以来スペインで育まれてきた重厚な学問の系譜をその背景とする。

1999 年 3 月、日本とサラマンカ大学との関係に画期的な展開が記された。サラマンカ大学が所有する歴史的建造物、サンボアール宮の全面的改修が行われ、その建物の 3 分の 1 にあたる正面の部分に日西文化センターが設置された。そしてセンターの一番広いホールは「美智子さまホール」と命名された。このセンターの設置は、サラマンカ大聖堂のルネサンス期のパイプオルガンの修復が邦人によってなされたことが機縁となり、日本の天皇・皇后両陛下が皇太子時代を含めて 2 度にわたってサラマンカをご訪問になったことが契機となった。

そして現在、日本語課程を備えたサラマンカ大学の主導により、日西文化センターは、スペインにおける日本語ならびに日本文化の普及拠点として、ますますその重要性を高めている。同センターでは、年間を通してさまざまな企画が開催され、日本語学習者のみならず、地域住民にも日本文化への接近を可能としている。また、わが国からサラマンカへと向かう留学生の流れに加えて、サラマンカ大学から日本に向かう留学生の双方向的な流れが着実に定着を見せ始めている。サラマンカ大学が歩んできた 800 年は、日本の学術分野に新たな相互交流の可能性を提示している。

(きのした・のぼる 南山大学外国語学部教授)

## 【エッセイ 1】

### 鼓直先生の叙勲について

西川 喬

2014年5月23日、鼓直先生はスペインから『文民功労勲章』(Encomienda de la Orden del Mérito Civil)を叙勲された。この勲章は、スペインのために功を成したスペイン人や外国人の、突出した業績をたたえるためにスペイン国王より授与される勲章である。鼓先生は東京のスペイン大使館において、Miguel Ángel Navarro Portera 駐日大使により、この勲章を授与された。

先生は長年にわたってスペイン語教育に従事され、龍谷大学、神戸市外国語大学、神奈川大学、法政大学で教鞭を取られた。2000年に退職されて、現在は法政大学名誉教授となっている。

またラテンアメリカ文学の翻訳などで偉大な業績を積み上げられてこられた。アストゥリアスの『緑の法王』を皮切りに、次々に主要な作家の翻訳を出版され、1970年代のラテンアメリカ文学小説ブームを支えた一人である。その後も、ガルシア・マルケス、オクタビオ・パス、カルペンティエール、バルガス・ジョサなどの翻訳を手がけ、この分野における第一人者となっている。2009年には瑞宝中綬章を受賞された。

私は1965年から4年間にわたって、神戸市外国語大学において先生のご指導を得るという栄誉を得た。ただし、当時はそんな立派な気持ちなどはなく、外大で一番若い先生が、1年生の文法から2年生以上の講読を担当してくれるんだ、訳された日本語は美しいけれども、文法はちゃんと説明できるのだろうか、などと生意気で鼻っ柱が強い何人かの仲間と集まれば、鼓先生の授業についてそんな傲慢なことなどを話した記憶がある。当時、学生といえば、下宿にはテレビも冷蔵庫もない、携帯電話もパソコンも持たない、今の学生が持っているものはほとんどなかった。当然金もないが、そのかわり時間だけはたっぷりであった。本もよく読んだし(時間をつぶすには、それがもってこいだった)、授業の準備も結構やったものだった(長い夜に、他にすることがなかった)。さて、あれは3年生の時、鼓先生の講読クラスのことだった。教科書としてスペインの小説を使っていたが、その本の中で今まで見たことがない接続詞の使い方に気がついた。それは、接続詞 y が全ての単語を結んでいる使い方だった。単語が列挙される場合、最後の二つの単語をつなぐやり方が普通だが、それ以外の使い方を知らなかった私は、授業が終わるとさっそく鼓先生に質問に行ったものだ。いままで、他の先生に何か質問した場合、それは来週まで調べておきます、と体よくかわされたことが少なからずあったので、今回もたぶん、そうなるだろうな、と思いながら、先生にこの接続詞の使い方はどういうものなのかと尋ねた。予想に反して、実に詳しい説明が帰ってきた。嘩然とする私に、先生は追い打ちをかけるかのように、スペイン語でこの現象は polisíndeton と言い、全部省略するのは asíndeton と呼ばれるのです、と静かな声でおっしゃって、黒板にその文字を書かれた。ありがとうございます、と言うのが精いっぱい、まさに知識に圧倒された思いだった。ずっと後になって、東京で一緒にお酒を飲む機会があって、その時のことを思い出して、先生に言ったところ、そのことはよく覚えているとおっしゃった。君のクラスは熱心な人が何人かいて、質問されてもいいように、予め前の晩に Gili y Gaya の “Curso Superior de Sintaxis Española” をよく読んでいたからね、西川君の質問の時は、偶然

そのページを読んでいたのさ、と笑われた。おそらく、「偶然」ではないだろうな、と思いつつ、話はそのまま当時の学生気質などに移っていったが、あの時の衝撃は今でも鮮やかに心によみがえってくる。先生は文学が専攻なのに、文法にも滅法強い、というのがあの当時の学生たちの、先生に対する評価だった。

私が先生の訳書を初めて読んだのは、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの『緑の法王』だった。いい文章というのは、こういうことなのだろうな、という印象が残っている。先生の訳書はほとんど読んだが、特にホセ・ドノソの『夜のみだらな鳥』は、もはや文章がどうのこうのという次元ではなく、醸し出される妖しい世界に引きずり込まれて一気に読んでしまった。読み終わってから、こんな世界を作り出す言葉の力に改めて驚嘆したものだ。

鼓先生はガルシア・マルケスの『百年の孤独』に象徴されるように、主にラテンアメリカ文学の紹介に精力を傾けられてきた。しかし、同時にスペインの文学も視野においておられる。フェデリコ・ガルシア・ロルカの『ニューヨークの詩人』やエドゥアルド・メンドサの『奇跡の都市』などの翻訳もあるし、小学館から出された『西和中辞典』初版の監修も手掛けておられる。まさに、「突出した」業績と呼ぶにふさわしい。

数か月前、鼓先生と何人かの方々と一緒に神戸で飲み明かしたことがあった。本当に朝まで飲み明かしたのだ。夜も更けて、何人かがもう眠いという顔をしているなかで、先生は教えていただいていたあの頃と同じ静かな声で、今はペルーの詩人オケンド・デ・アマーが最も気にかかる前衛派の一人ですね、少しずつ翻訳を進めています、とおっしゃった。80歳をとうに超えられても、尽きることのないこの情熱はどこから来るのだろうか。

9月には昔の教え子たちが神戸に集まって、感謝の念と共にささやかなお祝いの宴を開こうと計画している。

(にしかわ・たかし 神戸市外国語大学名誉教授)

## 【エッセイ 2】

### 薄緑の街と詩人たち—世界詩人会議第6回大会—

野谷 文昭

1982年7月、マドリードのアテネオを会場に世界詩人会議第6回大会が開かれた。それは刺激的であると同時に不思議なイベントでもあった。その理由は、後で述べるように、当時のスペインの政治状況とも無関係ではない。会議の議長を務めたのはフスト・ホルヘ・パドロン。ラス・パルマス出身の詩人で、東京で出会った彼に参加を要請され、半信半疑ではあったものの当時は海外に出かけるチャンスもなかったことから、とりあえず引き受けた。出発間近になって、雑誌「すばる」からアルゼンチンの作家オメロ・アタナシウの短篇5つの翻訳を頼まれ、編集者に事情を言って断ろうとしたところ、逆に「みんなこういう修羅場を乗り越えて一流になるんだ」という篠田一士氏からのメッセージを伝えられ、やむなく徹夜で仕上げ、そのまま空港に向かったのだった。

会議の模様については、帰国直後に読売新聞のコラムで簡単に紹介したのだが、いま手元に記録がないので、記憶に頼ってこのエッセイを書いている。世界各国の詩人による自作の詩の朗読や研究者、批評家らによる報告、シンポジウムなどからなる会議は、22日から24日に掛けて行われた。当然ながら、参加者の多くはスペイン語圏出身者で、中にはいわゆる「パ

ディーリャ事件」で有名な、キューバのエベルト・パディーリャ夫妻のような亡命者も混じっていた。筆者自身は日本の批評家という肩書だった。それが、いつの間にかアジア代表として扱われ、最後にはペルーのニコノル・パーラ、ニカラグアのエルネスト・メヒア・サンチェス、コロンビアのエドアルド・カランサという大詩人らとともに会議の宣言文に署名することになってしまった。そのときは、まるで自分が不思議の国に迷い込んだ気がしたものだ。

一方、ボルヘスも参加すると聞かされていたのに、会議が始まる直前、マヨルカで静養中、浴槽に張ったお湯が熱すぎて火傷を負ったために欠席という報が入ったのは残念だった（これも不思議な話なので、後年、マリア・コダマに確認したところ、それは本当で、部屋の係りが温度を間違えたとのことだった）。筆者はもちろんだが、主催者はさぞかしがっかりしただろう。というのも、それを理由に「不在の大会」などと反政府系の新聞で揶揄されたからだ。その記事に反発したパドロンが抗議声明を出すといった一幕もあったのだが、そのあたりの事情については若干説明が要るだろう。

フランコの死後、政権の座にあったアリアス・ナバーロが1976年に更迭され、その後釜として国民運動の事務局長を務め、国王と良好な関係にあったアドルフォ・スアレス・ゴンサレスが首相に指名される。だが政権の母体となった中道連合が内部分裂を起こし、スアレスは1981年2月に辞任してしまう。その跡を継いだのがレオポルド・カルボ・ソテロだったが、彼の政権も短命で、翌年12月までしかもたなかった。しかも1981年の2月には国会を乗っ取る形で軍事クーデターが発生し、国王が支持せず失敗に終わるといのように、落ち着いたかない日々が続いた。後で考えてみると、大会はスアレス政権期に企画されたため、中道連合との結びつきが強いと判断されたことから、やがて政権に就くフェリーペ・ゴンサレスを支持する勢力から色眼鏡で見られていたようだ。スアレスの手腕によって民主化が定着したものの、時代の転換期にはより過激な言動の方が支持を得やすい。まさにこの転換期に詩人会議は開かれたのだった。初日にはいなかったラファエル・アルベルティが最終日には顔を見せたというのも、情勢を見てのことかもしれない。

さて、アジア代表になってしまった筆者だが、来るだけでいいと言われていたこともあり、徹夜を押しつけて馳せつけるので精一杯だったことはすでに述べた。だが、突然何か話せと言われ、慌てたことは言うまでもない。スペインとラテンアメリカの詩に関しては、それ以前にジョゼ・マリア・カステリェト編の2種類のアンソロジーを自分で訳していたため、こと現代詩についてはかなり詳しくなっていたので、報告者のひとり、アントニオ・コリーナスが何者かというのも分かっていた。しかし1970年代に入れ込んだネルーダやバリェッホのことを話しても当たり前すぎると悩んだ末に思いついたのが、今年生誕百年を迎えたオクタビオ・パスがかつて編んだ『レンガ』のことだった。

そのころ日本で連句がちょっとしたブームになっていて、安東次男を宗匠として大岡信、丸谷才一、石川淳らによって歌仙が巻かれ、それが「すばる」のような雑誌に載った。それを思い出し、パスがジャック・ルボー、エドアルド・サンギネッティ、チャールズ・トムリンソンとともに1969年に行った連詩の試みとダブらせることにしたのだ。報告のタイトルは「新たな集団詩の試み」である。もっとも、連句よりも、安東次男が亡くなった後、大岡信が岡野弘彦や外国の詩人も交えて試みている連詩のほうが、パスの「レンガ」に近いかもしれない。いずれにせよ、手元には資料がまったくなかったので、典型的な知ったかぶりの報

告であったことは間違いない。パスは『レンガ』をブルトンに捧げている。とすればそこにはやはりシュルレアリスムの精神や実験が反映していると見ても差し支えないだろう。予定調和せず、意外なものを生む、集団による自我や個を超える試みというのが大枠としてある。それが連歌や連句との接点であるといったことを述べた気がするが、正論だったかどうかは定かではない。

翌日、プロのカメラマンから大きな写真を買わされた。そこには物凄い形相をした筆者の顔がアップで写っていた。捨てはしなかったが二度と見たくないと思っているうちに、引越に紛れて見つからなくなったのはむしろ幸いと言えるだろう。議長には申し訳なかったが、親しくなったニカノル・パーラ（彼も生誕百年だ）とマリオという名の彼の友人と一緒に、例の抗議文のことで紛糾していた会議を抜け出し、街に出て安い食堂でランチを食べたり、彼のチリでの教え子のアパートに行き、あれこれ雑談をしたりした。そんなことや、パディーリャに亡命の理由を尋ね、とにかく海外旅行がしたかったからだという答えを得たことも、いまや良い思い出となっている。

そのときの思い出としてもうひとつ付け加えておきたい。会議でカナダから参加したアルゼンチン出身のスペイン現代詩研究者と知り合う。彼女は当時マドリードに住んでいたアントニオ・ディ・ベネデットと親しかった。この作家は軍事政権下で拷問にあい、脳を痛めたと彼女から聞いていたが、アルゼンチン・ペンクラブが彼を守らなかったため亡命したことは後で知った。会議の翌日、彼女に誘われ、質素なアパートを訪ねた。温厚かつ物静かな初老の男性は、こんなものしかないけれど、と言って、冷蔵庫からワインとハムを出し、ボカディーリョを作ってくれ、さらに Zama という小説をくれた。そのアルゼンチン作家がボラーニョの短篇に出てくるセンチニのモデルであることを、そのときはもちろん知らなかった。

あのときマドリードの街は、ハリエンジュの花びらが作る薄緑の絨毯が印象的だった。東京でも、同じ薄緑の絨毯に出くわすことがあり、そのとたん 1982 年 7 月のマドリードと詩人会議のことを思い出す。

(のや・ふみあき 名古屋外国語大学教授)

### 【エッセイ 3】

#### アドルフォ・ビオイ=カサーレス生誕百周年によせて

野村 竜仁

鼓直先生の「〈影のヒーロー〉、ビオイ=カサーレス」（『ラテンアメリカ文学を読む』所収、国書刊行会）によると、この作家の名前が初めてわれわれの目に留まったのは、ボルヘスの「トレーン、ウクパール、オルビス・テルティウス」の作中人物としてだったとか。この短篇中でビオイ=カサーレスは、人間の数を増殖させるゆえに鏡を忌んだ異端の教義に言及しているが、回想録の『メモリアス』で述べているように彼自身は鏡を嫌悪することはなく、むしろそこに映しだされるイメージに魅了されて代表作『モレルの発明』の着想を得ている。

『モレルの発明』の映像など、ビオイ=カサーレスの作品ではしばしば鏡像のような反復が描かれる。短篇集『大空の陰謀』の表題作における多元的な宇宙は鏡像のごときのものであろうし、同作品の主人公の冒険や短篇「影の下」などで語られる輪廻も運命の反復として読む

ことができるだろう。そうした反復は完全なる鏡像とはならず、微細なゆがみをともなっている。作品中の人物たちは愛を得ようとして反復する運命に身を委ねるが、そのゆがみの中で自分の求める相手が別の位相に属する影絵のごとき存在であり、自分自身もまた影にすぎないことを悟っていく。彼らの姿は、ビオイ=カサーレスの語った夢の話の思い起こさせる。

「小さな映画館に入った……。一番うしろの席にいたので、何人かの大きな頭が邪魔になった。それは神々だった。彼らは人間たちの営みを映画のように観ていた。その時にわかったんだ。神は慈しみ深いのに、なぜわれわれに苦しみを与えたり、悲惨な生涯を送らせたりできるのか。その理由は、人生が真実のものではなく神々を楽しませるための単なる見世物にすぎないからなんだ」(Graciela Scheines, Adolfo Bioy Casares, "El viaje y la otra realidad")。

運命にもあそばされる作中人物たちの姿は、時に滑稽でさえある。しかしビオイ=カサーレスは「つねに、自分をもっとも好むものや気に入っているもの、あるいは痛ましきや哀れみを感じるものにさえ、滑稽な側面を見出そうとする」(『メモリアス』大西亮訳、現代企画室)。自分が写像にすぎないことを受け入れつつ信念に殉ずる者たちを、作者は深く愛していたということだろう。

作中人物としてわれわれの前にあらわれて以降、ビオイ=カサーレスの作家としての営為はボルヘスとの共著を含めて日本に紹介されてきた。今年はその生誕百周年に当たり、それを記念する催事なども行われているだろう。ビオイ=カサーレスの新たな鏡像にまみえる機会を心待ちにしたい。

(のむら・りゅうじん 神戸市外国語大学教授)

## 【エッセイ 4】

### スペインの未来主義——バセウルとアロマル

鼓 宗

ビセンテ・ウイドブロは評論集『徒然に……』*Pasando y pasando...* (1914)で、〈未来主義〉はマリネッティのものではない、二人のスペイン語圏の詩人たちこそが先唱者だと述べている。その二人とは、ウルグアイのアルバロ・アルマンド・バセウルとスペインのガブリエル・アロマルである。

バセウルは1904年の詩集『先触れの詩』*Cantos augurales*で、詩人にとって大切なのは出来事の堆積である過去ではなく、ものを生成する過程、すなわち創造であるとした。そして自らの美学を〈前兆主義〉*auguralismo*と名付けた。ウイドブロはこれを呼び名こそ異なるものの〈未来主義〉の先駆けだと捉えて、未来主義はアメリカ大陸のものであると主張している。

一方、アロマルは前衛主義者というよりも高踏派に近かったが、1904年、バルセロナの文芸協会では「未来主義」*El futurisme*と題した講演を行った。パルマ・デ・マヨルカ出身の詩人はカタルーニャ語で、科学と芸術の調和がより公正で完全な社会をもたらす、都市においてそうした理想が実現されるという旨を語った。この講演は広く関心呼び、その年のうちに講演録が出版された。

仏紙「フィガロ」に「未来派宣言」が掲載されたのが1909年。マリネッティは、二つの〈未

来主義)を知っていただろうか。実は前年、「ル・メルキュール・ド・フランス」紙にアロマルの講演の要旨が載っており、彼がそれを読んだ可能性は高い。他方、「未来派宣言」の一ヶ月ほど後にその批評を「ラ・ナシオン」紙に寄せたルベン・ダリーオは、二つの流派の呼称の一致は偶然に帰するのではないかと言っている。

もっともダリーオはマリネッティの独自性を認めながらも「咆哮する自動車はサモトラケのニケよりも美しい」という有名な一節を比喩が不相当だと断じるなど(バセウルも「ミラノの〈運転手〉のユーモア」と揶揄している)、宣言そのものには辛辣である。この態度はダリーオを敬愛するウイドプロにも共通しており、先の評論集では、自由詩の称揚を除いて「未来派宣言」の全体を厳しく批判している。

前衛芸術の発展に大きな影響を及ぼしたのがイタリアの〈未来主義〉であったことは否定しがたい。カタルニャ主義運動への傾倒、ヨーロッパにとって周縁であるラテンアメリカからの発信という、二人の詩人の未来主義が忘却された理由もある。それでも未来主義へのスペイン語圏からの貢献には、あらためて評価が必要なのではないだろうか。

(つづみ・しゅう 関西大学外国語学部教授)

## 【エッセイ5】

### 2014年夏キューバ出張記

安保 寛尚

ハバナへと降下していく飛行機の中でもう熱気を感じ始めた。空港を出ると、日本に置き去りにしたはずの猛暑の抱擁を受けた。べったりまとわりつく湿気に顔がゆがむ。この夏キューバは63年ぶりの暑さに見舞われているとのことだった。

キューバの地を踏むのはおよそ8年ぶりだ。その間、フィデルの政界引退という一大事が起こったが、はたしてキューバは変わったのか。今回の滞在は一週間にすぎず、しかも多くのキューバ人がバケーションの最中だったから、もちろん確かなことは言えない。けれども、少なくとも前回の状況よりは良くなっているようだ。家の売買や引っ越しが認められるようになり、小規模の商売に対する自由化も進んでいるらしい。こころなしか、道行く人々の表情には明るさやゆとりが感じられる。お洒落でおいしいレストランも少し増えたように思う。黒豆ごはん(arroz moro)に豚肉のスペアリブ(chuletas de puerco)、これにヤマイモやバナナの揚げ物(malangas fritas, plátanos fritos)を添えたものなど、レオナルド・パドゥーラ・フェンテスの探偵小説に出てくるようなキューバ料理に、今回はいろいろなところで舌鼓を打つことができた。

8月中旬のハバナはカーニバルの季節だ。週末の夜、マレコン通りに設けられた観覧席の前を、ハバナの地区ごとに組織された踊り手(コンパルサ)、楽団(コンガ)、そして豪華に装飾された山車(カロッサ;牽引するのは農業用トラクターのようだが…)が次々に通っていく。リオのカーニバルほどの規模ではないにせよ、統率のとれたダンス、華やかな衣装、会場を震わせるほどに激しく打ち鳴らされる太鼓に陶然として見入ってしまう。しかし観客の最大の歓声を浴びていたのは、Voluminosasとアナウンスされていたふくよかなおばさんたちのグループだ。彼女たちは満面の笑顔で、体中のお肉をタップンタップンさせ、汗を滴らせながら卑猥なダンスや挑発的なポーズを見せつけるのだった。また驚いたのは、奴隷制



時代のカーニバルを彷彿とさせるグループがいくつもあったことだ。アフリカの王侯貴族を模した踊り手や、アバクアー秘密結社の代名詞とも言える、独特の衣装をまとったイレメ（ireme）の登場には興奮を抑えきれなかった。夢見心地で、夜中の3時まで続いたパレードに、奴隷制時代の公現祭の日（1月6日）、いつときの自由を得た黒人奴隷が部族ごとにハバナの町を練り歩き、チップを求めた光景を重ね合わせた。

何事もなく、経済的にキューバを旅行するには、キューバ人と交わらないことだ、と思う。声をかけてくる連中はたいていお金目当てで、そこら中につるんでいる仲間がいる。うっかり反応したり一緒に行動し始めると、芋づる式に仲間が湧いて出てくるのだ。とはいえ、ホテルや旅行会社頼りの引きこもり旅、というのも少し寂しい。だから多少の出費は覚悟して、彼らとはうまく交渉し、付き合う術を身につけることだ、とわかったような気でいたら、今回ビニャレス旅行中痛い目にあった。ハバナのあるホテルで宿（宿経営の許可を得ている家）だけ予約して出発したのだが、ビニャレスに到着するや、一人の婦人がうちに泊まりなさいとしつこく誘ってくる。もう予約してあると断って、ホテルで受け取った名刺を見ながら宿泊先を探していたら、その婦人が別の婦人を指して、あの人の家その名刺の\*\*\*さんよ、と言う。えっ。話をすると、そう、うちが\*\*\*よ、あなたを探していたの、そこに車を待たせているわ。ずいぶんと気が利いている。迎えてくれた夫婦の感じもよく、清潔な部屋にも料理にも満足して一晩を過ごした。翌日、バイクで途中まで送ってもらった後、mogoteと呼ばれる切り立った山が散在する美しい景色と、逃亡奴隷の住処として利用された洞窟を観光した。深い感銘を受けて町に戻ってくるまではよかったのだが、預かってもらった荷物を引き取りに向かうと、名刺を手にとり着いたのは全く別の家だった。出てきた家人に、昨日準備して待っていたのにどうして来なかったのと聞かれて、ようやくだまされたことに気づく。しばし茫然自失。日曜日だから役所は閉まっている。ならば前日聞いた夫の名前と、彼が機械工をやっているという情報だけを頼りに、自分の足で宿泊した家を探すしかない。炎天下の搜索は絶望的なまでにしんどかったが、結局荷物は無事で、法外にお金をだまし取られたわけでもない（本来宿泊予定だった家よりも800円程度高かったが）。手口は悪質だけれど、こういった連中に悪意はないのだ。（家の名刺を渡し忘れるなんて）とんでもない忘れんぼね、と迎え入れた婦人を問い詰める気は起こらなかった。しかしさらなる衝撃が、ハバナへの帰り道、すし詰めの乗り合いタクシーで待ち受けていた。高速道路を走行中、ぼろぼろのクラシックカーのボンネットがバーンと外れて持ち上がり、フロントガラス全体を覆ってしまったのだ。右へ左へよろめきながら、何とか路肩にたどり着くまで、さすがに生きた心地がしなかった。応急処置をしている間、カーステレオのボリュームを上げて、¡Al mal tiempo, buena cara! と乗客みんなで笑いあったが、キューバでの行き当たりばったりの旅がどんな冒険にも勝ることを、つくづく思い知ったのだった。

（あんぼ・ひろなお 立命館大学法学部准教授）

### 【書評1】

ロベルト・ボラーニョ『売女の人殺し』（松本健二訳、白水社、2013年）

花方 寿行

今やラテンアメリカ文学にとどまらず、翻訳外国文学の中でも格別の評価を受けるように

なったボラーニョだが、本書は白水社から刊行される「ボラーニョ・コレクション」の記念すべき第1回目の配本となった短篇集。日本で最初の翻訳となった『通話』の訳者であり、それ以前より論文を通してボラーニョを紹介してきた松本氏の訳文は、淡々としながら不意に不気味さやユーモア、狂気や寂寥に切り替わるボラーニョの文体を、見事に日本語に置き換えており、その作品理解の深さが窺われるものとなっている。

『野生の探偵たち』『2666』という2大長編の印象が強いボラーニョだが、本書をはじめとする短篇集も多い。だがあたかも収録作「歯医者」に登場する作品の如く、本書収録作の大部分は、その短さにもかかわらず長編とよく似た読後感を残す。ボラーニョ長編は多くの挿話から成り立っているので、短篇はそうした挿話を磨き上げ完結させたものになりそうな気がするのだが、そうではない。はっきりしない予兆に不安と希望を抱きながら彷徨を繰り返す人物たちを描くという構造こそが共通し、読者は確かに量的にこそ短い、質的には長編と同じ体験を繰り返すことになる。それでもなお同工異曲の感を与えず、毎回惹きつけてみせるところにこそ、ボラーニョの独特の力強さがある。

なお本書では、長編では量的にも長い遍歴の中に啓示の瞬間が散りばめられるため分りにくくなっているボラーニョの宗教的な感覚が、認識しやすくなっているのが特徴だ。決して抽象的な暴力に流れることなく、常に現実の政治的社会的暴力を意識して作品を構成していることには変わらないが、『2666』に先駆け本書では、凄惨な暴力や汚辱の情景がそこにこそ宗教的な顕現が立ち現れる場として描かれている。常に暴力を被害者の側から描くボラーニョ作品だが、例外的に「加害者」側から語られる表題作において、語り手が彼にとっての究極の「他者」である女性なのは、興味深い。そして写真や（ポルノ）映画といった記録媒体は、目前の卑俗な現実を映そうとしつつ、常に混乱した断片的なイメージを提示するにとどまりながらも、形而上的なヴィジョンへと飛躍するよすがとなる。それはボラーニョの芸術観でもあり、東方キリスト教におけるイコンの役割でもある。

通常実在の映画への言及が簡略にとどまるボラーニョ作品において、例外的に長くストーリーが紹介されるのが、「一九七八年の日々」におけるタルコフスキー監督『アンドレイ・ルブリョフ』だということは、重要だ。イコン画家を主人公とする『ルブリョフ』がこの作品で果たす役割は、「ラロ・クーラの予見」や『2666』における架空のポルノ映画のものに相当し、後者の汚辱の中に顕現を求める読みを正当化する。白黒の『ルブリョフ』において、最後にイコンと自然だけが鮮やかにカラーで浮かび上がる手法は、「ゴメス・パラシオ」ラストの「奇蹟」に通ずる。そしてボラーニョ作品に一貫して登場する、一見ありふれた日常の中を異様な恐怖と期待をもって主人公たちが彷徨する場面に通ずるものは、他の文学作品よりもタルコフスキーの『ストーカー』にこそ見出されるのだと気づかされた時、読者はボラーニョを読み解く新たな鍵を手にした感動に打ち震えるだろう。

(はながた・かずゆき 静岡大学人文社会科学部准教授)

## 【書評2】

ロベルト・ボラーニョ 『鼻持ちならないガウチョ』(久野量一訳、白水社、2014年)

高際 裕哉

本作品は、Roberto Bolaño, *El gaucho insufrible* (Barcelona: Anagrama, 2003)の全訳で

ある。白水社のボラーニョ・コレクション全8巻の内の第2巻目として、今年の4月に刊行された。同じく白水社のエクス・リブリス・シリーズに収められた長編小説『野生の探偵たち』(上巻・下巻)(柳原孝敦、松本健二訳)、『2666』(野谷文昭、内田兆史、久野量一訳)を含めると、ボラーニョの翻訳作品としては5冊目にあたる。

これは注記しておくべきことだろうが、『鼻持ちならないガウチョ』は今年の5月の時点で二刷目が刊行されている。既刊の『野生の探偵たち』および『2666』を含め、日本の現代海外文学翻訳の世界において、ボラーニョのもつ存在感は、今日、圧倒的なものであるに違いない。

翻訳者あとがきによれば、原著は著者の没後に出版された。ボラーニョの事実上の遺作であるという。本書は7つの短編小説から成り立っている。この稿では全ての短編小説の内容を紹介しきれないので、数作品の紹介に充てたい。

本作品の冒頭に置かれた「ジム」は、わずか3頁ほどの短編小説であるが、強烈な印象を読者にもたらす。語り手はメキシコシティに住む若者で、ボラーニョと重なる点も多い。その都市で語り手は、ベトナム戦争の海兵隊あがりの自称詩人「ジム」という米国人と知り合う。ジムは自称詩人であり、彼の詩のヴィジョンとは「語彙、雄弁さ、真実の探求。顕現(エピファニー)。聖母マリアが姿を現したときのような。」というものだった。大きな通りで火を噴きながら物乞いをする男を見つめ、語り手はジムに「路上で死んでしまいたいのか」とうそぶく。語り手の脳裏に当時のアングラライブ小屋で流れていた、「クソツたれ、呪われし者／クソツたれ、呪われし者」という歌のリフレインが響く。おそらくジムは戦争のトラウマからくる死への衝動と、放浪と詩の中で時折垣間見る「顕現」の美しさの間で何とか生の世界へぶら下がっているような人物だった。おそらく、この作品はボラーニョの詩のヴィジョンと通底していたのではないだろうか。そうであるから、語り手にとってジムは「友人」だったのだろう。ボラーニョのものしたテキストの中にわずかに見受けられる米国のビートニクスの影響を感じられる部分でもあるだろう。

表題作である「鼻持ちならないガウチョ」は、作品の二番目に挙げられている。主人公はブエノスアイレスで法曹として成功をおさめた男、エクトル・ベレーダ。2001年のアルゼンチン通貨危機を機に、貯蓄を失い、ガウチョがまだ存在するはずのパンパへと移住することを決める。しかし、ついた先の農場には牛ではなくウサギばかりがおり、ガウチョたちは主にウサギを買うことで生計を立てていた。作中で触れられているのだが、ベレーダの頭の中にあっただのはボルヘスの「南部」の世界であり、その世界と現実のガウチョとパンパが異なることに腹を立てながらも農場でのガウチョとの暮らしを楽しむ。時折時代的なインデックス(1976年クーデター、ペロン派・反ペロン派、民営化されるであろう鉄道)が物語の中に現れる。アルゼンチンのナショナルなイメージとして重要な「パンパ」や「ガウチョ」などもおらず、以前と変わらない街並みのブエノスアイレスも無秩序に覆われている中、成功した人生を送ったと思われるベレーダは、物語の最後、残った家を処分しにブエノスアイレスへと帰還するが、再び、パンパの農場で暮らすことを決意する。

この作品は間違いなくボルヘスの「南部」と併せて読まれるべきだろう。ボルヘスの「南部」はブエノスアイレス暮らしをしていた図書館員が、パンパへと渡り、最終的にガウチョとナイフ一本で決闘をするはめになる、という物語である。一方で、ボラーニョの本作品で

は、ブエノスアイレスのカフェの一角で、半ばガウチョと化したベレーダが、鼻持ちならぬ男を一方向的にナイフで刺してしまう。このずらし、および、物語世界(あるいは 2001 年以降のアルゼンチン)での頓狂な物語の顛末が、ボルヘス的であり、ドン・キホーテ的ですからみると、筆者には読み取れた。

残りの作品、「鼠警察」は都市の下水道の中で次々と起こる殺人ならぬ殺鼠を追う、刑事(人間ではなく鼠)の物語である。カフカの「歌姫ヨゼフィーネ、あるいは二十日鼠族」へのオマージュである。ただし、次々起こる不可解な殺人や暴力沙汰は、ボラーニョ独特のそれである。「アルバロ・ルーセロットの旅」は 1950 年代である程度の評価を受けたとされる、虚構のブエノスアイレスの作家のパリへの旅行譚である。「二つのカトリック物語」はおそらくスペインの村を舞台にした、信仰へと傾く少年の物語と信仰を欺く浮浪者の堆肥的な二つの物語である。「文学+病気=文学」は病の床で書かれたと思われる、病気と文学に関するボラーニョ流の文学エッセイである。「クトゥルフ神話」もまた、文学批評の体裁を取っており、現在売られているスペイン語作家、名が通っているスペイン語作家と、そうではない黙々と作品を書き続ける作家との対比を描いている。出てくる作家名が半端な量ではなく、ボラーニョによる一種の文学事典であるとも読み取れる。

ボラーニョは 1953 年、チリに生まれ、ほどなくメキシコに渡る。青年期を過ごしたのちは、詩と小説の読解と執筆、および街の放浪だけを人生の糧とし、スペイン語圏中を回りを、2003 年バルセロナで没した。ボラーニョの短編小説の世界は、ある程度読み進めるまで物語が、一体どこで、一体いつの時代で展開されているのか、目くらましをくらすことが多い。作品世界の謎解きの要素も、文学専攻の徒のみならず、カスティージャ語世界に触れている人間にとって、ボラーニョ作品がアピールしてくる魅力の一つであろう。

文字数の関係上、多くは語れなかったが、ボラーニョの短編作品が持つ魅力を存分に垣間見れる一冊である。本作品は一過性のブームにとどまらず、息が長い作品であることは間違いないだろう。

(たかぎわ・ゆうや 東京外国語大学大学院博士後期課程)

### 【書評 3】

ホセ・ドノソ『別荘』(寺尾隆吉訳、現代企画室、2014 年)

大楠 栄三

先祖代々、原住民のつくる金箔の売買によって巨万の富を得てきたベントゥーラ家の別荘は、グラミネアという植物に覆われた荒野のただ中に位置する。周囲に張り巡らされた 18,633 本の鋼鉄の槍の柵で人食い人種から護られながら例年、一族はそこでバカンスを過ごす。

ある日、別荘に 33 人の子供たちだけが取り残される。大人たちは、伝説の楽園へハイキングに出かけたのだ。子供たちの多くは、親に見棄てられたのでは、と内心怯えつつも、大人たちの監視を免れ、仮面劇「侯爵夫人は 5 時に出発した」に興じる。

ただ、無法地帯と化した屋敷のなか、日頃から抱いていた欲望や疑問に突き動かされ、本性を顕わにする子供たちもいた。母親の前で模範的な息子として振る舞っていた美少年ウェンセスラオは、金色の巻き毛を切り落とし、スカートを脱ぎ捨て、気が狂ったとして塔に幽閉された父のもとに駆けつける。

一族の家父長エルモヘネスの長女カシルダは、父の取引を手伝いつつ機会を窺ってきた企てを実行にうつす。従兄弟たちを巻き込み、一族の金箔を持ち去るといったのだ。そんな彼らの行動をこっそり覗く二つの影があった。若い原住民と、不義の従妹で「文無し」のマルビナである。二人に助けられ、彼らは金箔の包みを馬車に積み込み、別荘から逃げ出す。

不穏な夜の到来を前に、幼い子供たちは食事と服を求めて母を呼びはじめる。姿が見えなくなった仲間に気づき、はたして屋敷に何人いて、何人いないんだ、と不安に駆られる。ウェンセスラオも、この機に乗じて一族が所有するマルランダ全体を改革しようとする父に疑念を抱きはじめる。

主人たちの命を受け、秩序の回復を掲げ帰ってきた使用人たちは、子供たちに対しどんな行動に出るのか？ 使用人に支配された屋敷内で、彼らは生き延びることができるのか？ 荒野で飢えに追い詰められた子供が口にしたものは？ 金箔を持って逃げ出した者たちの結末は？ 結局、大人たちは戻ってくるのか？

さまざまな疑問を抱きつつ、読者は『別荘』という物語世界に没入していく。実際、最終章で語り手が漏らすように、これほど「登場人物との別れ」を辛く感じた小説は、僕も久しくめぐり会わなかった。だが、『別荘』の語り手は同時に、全知全能の作者として露骨に顔を出し、そんな前世紀的な読みを嘲笑う。ある時は、「自由」、「進歩」、「時間」に関する因襲的概念、ことに、従来のリアリズムを痛烈に批判する。「フィクションでありながらフィクションでないように見せかける」のは偽善にはかならないと吐き捨てるのだ。またある時は、『ドン・キホーテ』のセルバンテスさながら、『別荘』の原稿を小脇に抱えて現れ、登場人物と作品の内容について語り合う。ただし、まるで自分の作品に自信を持ってない小心者として。

解説によると、『別荘』執筆に重要な役割を果たしたのは、ドノソが当時住んでいたスペインの小村カラセイテ Calaceite だという。エプロ河が地中海に流れ込むトルトッサからテルエルに向かう中途、立ち寄ったことのある僕には、あの平凡な町でグラミネアの綿毛渦巻くマルランダが生み出されたことが驚きでならない。香ばしい匂いが漏れ出る竈の蓋を開けると、中に見えたのは「口に無理やり林檎を詰め込まれて笑顔を浮かべ、カーニバル用の冠のようにパセリやローレル、ニンジンやレモンの輪切りで額を飾られた」娘の顔——冒頭からこうしたイメージで読み手に衝撃を与える物語なのだから。また、チリはもとより、ラテンアメリカ全般の歴史にさえ明るいとは言い難い僕にも、強い政治性を想起させる箇所が散見された。「結局のところ法が現実を作るのであって、その逆ではなく、また、権力の座にある者が法を作るのだから、権力さえ押さえれば、すべてはどうにでもなるはずなのだ」——いまの日本にも当てはまるリアリティ…… なるほど、これは驚異の傑作だ。

(おおぐす・えいぞう 明治大学准教授)

#### 【書評4】

且 敬介『旅立つ理由』（岩波書店、2013年）

柳原 孝敦

『旅立つ理由』は『ライティング・マシーン—ウィリアム・S・バロウズ』（2010）以来の且敬介3年ぶりの著書で、単著としては4冊目、フィクションとしては『逃亡編』（1993）、『ようこそ、奴隷航路へ』（1994）に継ぐほぼ10年ぶり3冊目ということになる。蛇足ながら付

言すれば、且さんはその間、翻訳書も多く出している。

『旅立つ理由』は、ANA グループ機内誌『翼の王国』2008年4月号から2010年3月号まで連載された短編小説集だ。第65回読売文学賞を受賞。ちなみに、随筆・紀行賞での受賞だ。短編集なのに？……といふことはない。文学のジャンルなど横断して読まれても何ら不都合はない。それはむしろ、日常的に行われていることだ。門内ユキエのイラストをふんだんに採り入れ、本書はきれいな絵本のようなでもある。アミーナという女性を巡る5篇も含んでいるから、連作と取る人もいるかもしれない。ともかく、旅を扱っているのだ。人とモノが国境を、海を、山脈を、時空間を横断する話ばかりだ。だったらジャンルを横断して読んでもいいじゃないか。

人はなぜ旅をするのか？タイトルを『旅立つ理由』というのだから、どのジャンルで読まれようとも、本書はこの疑問に答えようとした一冊には違いない。とりあえずは、媒介となるため、という答えを見いだしてみよう。

「ハンモックを吊る場所」はケニアに住む離婚した日本人夫婦の話だ。元妻が勤めていたマサイ・ラマのホテルを辞め、ナイロビに戻ってきて再会、話をするうちに、ふと、元夫が、ハンモックはどうしたかと訊ねるのである。二人が知り合うよりもずっと前に、夫がメキシコで友人から手に入れた極上のハンモックだ。夫はそれを東京に持ち帰り、ケニアに運び、妻の住むホテルの部屋のテラスに吊ったのだった。妻は、しかし、ホテルから持って帰るのを忘れたという。遠くを眺める目つきで夫は、メキシコで友人と知り合った経緯やハンモックを手に入れた次第を語り出す。話を聞いた妻は、誰かに送ってもらおうかと提案する。しかし夫は、その申し入れを断るのだ。「きっと、誰かがそのうち使い始めるだろう。それでいいんだよ」と言って。さらには、「マサイの従業員が持って帰って使い始めて、新しい文化ができちゃったりして」と「面白そうに笑」いながら。

鳥が花粉を遠くに運ぶように、人間は遠くにモノを運ぶ。花粉は遠くの地で発芽し、新たな芽を吹くが、植物の個体としてのあり方は変わらない。モノもどこにあっても同じモノであり続ける。けれども、植物は周囲の植物との関係から環境を形づくる。モノは人との関係から文化を形成する。環境や文化は、ひとつひとつの花粉が、モノが、運ばれた先で新たに作り直すものなのだ。旅をする者はこうして、新たな文化のためのモノの運び屋であることを自覚する。媒介であることを自覚する。この短編はそのことを伝えている。

でももちろん、簡単には運べないものもある。インジェラ焼き機の場合がそうだ。インジェラというのは、エチオピアの丸いクレープ状の主食のことだ。政変によってケニアに逃れてきたマリオという人物が後生大事に抱えていたのが、その機械（「マリオのインジェラ屋」）。難民キャンプを出てインジェラ屋で成功していたマリオを、視点人物の「彼」がしばらく見ないと思ったら、第三国に旅立ったのだという。それを聞いて「彼」は「マリオが空港でインジェラ焼き機を持っていこうと必死で交渉している映像」を思い浮かべる。

「これはわれわれの文化そのものなんだ、これがなくては食べていけないんだ」とマリオはめずらしく必死になって訴えている。いつもの控えめな調子とはうって変わって、腕を振りまわして、口角泡を飛ばしている。

しかし、いくら何でも大きすぎ、いくら何でも怪しすぎた。

モノは時として、「怪しすぎ」るらしい。では、怪しすぎて運べないモノを運ぶことができないまま旅する人は、どうすればいいのか？きっとそのことに対する答えも、本書には見出せる。

(やなぎはら・たかあつ 東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

## 【書評5】

ティルソ・デ・モリーナ『セビーリャの色事師と石の招客 他1篇』

(佐竹健一訳、岩波書店、2014年)

田尻 陽一

『セビーリャの色事師と石の招客』の3番目の翻訳が、佐竹健一氏によって岩波文庫に入った。ちなみに1番目は会田由訳（世界文学大系 89、筑摩書房、昭和38年：1963年）、2番目は岩根圀和訳（スペイン中世・黄金世紀文学選集 7、国書刊行会、1994年）である。古典に関して新訳が出るということは、最新の研究を踏まえて新しい校定本が出版され、論文を読んでも説得力のある研究者が施した注釈本が出された時、つまりそれまでの翻訳に問題点がある場合が絶好の機会であろう。そういう意味で、今回の翻訳の底本が Alhambra 社の1983年なのが気になった。注釈者の Xavier A. Fernández は“Homenaje a Tirso” (1981) に“Precisiones deferenciales entre 《El burlador》 y 《Tan largo》”という論考を載せているし、“Las comedias de Tirso de Molina” (1991) という研究書も出版している。しかし、Alhambra 社版はいまから30年前の本なのだ。

会田氏の翻訳底本は分からない。岩根氏の底本は Américo Castro の注による Clásicos Castellanos 版である。小生が持っているのは第9版 (1970) だが、初版 (1932) を書き改めた様子はないので、佐竹氏は岩根氏より50年後の校訂本を底本にしたことになる。しかし、Alfredo Rodríguez López-Vázquez の注による版が Letras Hispánicas (1989) から出ている。小生は Rodríguez López-Vázquez の「作者に関する新説」には賛同しないが、4番目の翻訳が出ることを期待したい。それほどこの戯曲は、後世に影響を与えたにもかかわらず、奇妙なほど不完全なのだ。

21世紀になってもスペイン本国で新しい注釈本が出てこない。何故か。ここでいえることは、一般的に作者が戯曲を書くと原稿を一座の座長に売り渡す。座長は一座の役者の力量、人数によって上演台本を作る。autor de comedias を「座長」という理由はここにある。断じて「劇団の会計係」ではない。もちろん座長だから、現在でいう演出の仕事以外にプロモーターとして役者との座組契約、劇場との公演契約、その日の興行収入の帳簿管理などすべての経営責任をとったが、「劇団の会計係」というのは彼の小さな仕事の一つでしかなかった。一座で所有する脚本は30本から50本ぐらい。1年ほど各地で上演し、観客から飽きられた演目は2流劇団に売り渡す。さらに3流の劇団の手にわたり、どの劇団も上演しなくなると出版社が買い取り、12本まとめて1冊の本として出版する。作者が書いてから少なくとも5年以上は経過している。佐竹氏が「解説」で書かれているとおり、出版社が作者の名前を有名作家にすり替えることは当たり前の話だった。こういった経過をたどって出版された戯曲はセリフの質の低下（端的に言えば長セリフのカット）から役者の数の削減が見られる。“El burlador de Sevilla y convidado de piedra”の初版 (1630) はこの種の戯曲であった。しかも

われわれは世界文学の見地からこの芝居の主人公をドン・ファンだと思っているが、舞台効果からみて当時の観客が一番喜んだ場面は石像が動くところであったろう。視点を変えれば4番目の翻訳が出てもおかしくない。

佐竹氏が出した岩波文庫本には『緑色のズボンをはいたドン・ヒル』が併せ収録されている。初訳を歓迎したい。次に『公爵邸のはにかみや』を含めて『トレドの別荘』の翻訳が出ることを期待している。主要参考文献のなかに佐竹氏自身も編集・翻訳にかかわった『バロック演劇名作集』（名古屋大学出版会、2003年）が抜けているので、念のために記しておく。この名作集にはティルソ・デ・モリーナの『不信心ゆえに地獄落ち』（中井博康訳）が載っている。

（たじり・よういち 関西外国語大学名誉教授）

## 【劇 評】

劇団クセック ACT『ラッパチーニの娘』（メキシコ大使館共催）

——禍々しい欲望の庭を言葉の草木が埋め尽くす——

斎藤 文子

本年、オクタビオ・パス生誕100年を記念して、劇団クセック ATC が、パスの唯一の戯曲 *La hija de Rappaccini* を舞台に載せた。翻訳・脚本、田尻陽一氏、構成・演出・舞台美術、神宮寺啓氏の黄金コンビは、期待に違わず、おそらくはパスの想像をも超えた驚きの世界を作りあげた。

医学部教授ラッパチーニ博士は一人娘ベアトリスを偏愛するあまり、毒を与え育て、生ける毒のフラスコにしている。彼女が触れ、息を吹きかけると、ふつうの生物はあつという間に死んでしまう。娘は家の庭に生える毒性の草木だけを友とし兄弟として、孤独に暮らしている。あるとき隣の家に大学生ファンが引っ越してきて、二人は恋に落ちる。互いに近寄ろうとしながら決して触れ合うことなく、激しく求め合い見つめ合う二人。ある日ファンは自分の吐いた息で新鮮なバラの花が萎れてしまったことに気づく。いつのまにか、ベアトリスと同じ毒をもつ身体になっていたのである。ファンの父親の友人であるバリオーニ教授が、ファンに博士の邪悪な企てを明かし、解毒剤を渡す。それを飲めば、ベアトリスは元の体に戻るといふ。初めて愛を知ったベアトリスは、父から自由になり、自分自身を取り戻すために、父の制止を振り切って解毒剤を飲み干す。

舞台の中央奥に置かれた細長いテーブル。それが終盤、シーソーに変わり、ファンとベアトリスが乗れば、二人の気持ちの揺れ動きを、ベアトリスがまたがれば、彼女の感情の不安定さを表象する。生か死か、愛か死か、善か悪か、ベアトリスはシーソーを踏み台にして自由に向かって飛び出せるのか。緊張のドラマはその着地点を曖昧にしたまま終わる。

劇団クセックの舞台の特徴のひとつは、数人から成るコロスを使って劇の流れを作っていくことだ。本作でも原作にはなかったコロスを登場させる。とくに舞台が始まるとすぐ、白い布をまとった人びとが何かに驚愕した表情でまっすぐ前を見据えながら、一列になって舞台をゆっくり横切って行進していく演出には度肝を抜かれた。前屈みのまま、超スローモーションで一歩ごとに足を高く上げ、手を前後に大きく振り上げる。鍛え上げられた肉体のみが可能な所作。何から逃げているのか、何に向かっているのか、何に驚いているのか。非現



実的な速度と動きが、観客を異空間へといざなう。この所作は、クセックの以前の作品でも使われていたが、今回は舞台の最後にも登場させたのが効果的だった。見る者は、ラッパチーニ博士のおぞましい実験の結末をゆっくり咀嚼する余裕を得た。

パスの書いた『ラッパチーニの娘』の物語は、見たこともない植物が育つ、光に満ちた庭で展開する。その中央には幻想的な一本の木があり、花と実をつけている。1956年初演時、舞台装置と衣装はシュールリアリスト画家レオノラ・カリントンが担当したというが、どのような舞台を作ったのだろうか。クセックの舞台は、白布をまとった白塗りの役者がうごめく闇である。花のひとつ、草の一本もない。娘が近親相姦的な愛で兄だと慕う木の代わりにあるのは、とぐろを巻く太い綱、その上に置かれた一抱えもある白い玉、そして真っ赤な一枚の布。舞台奥には細長いテーブル。観客は、毒のまわった庭を求めて、役者たちが繰り出す言葉の草木で黒い板張りを埋めていくしかない。開幕前の待ち時間に眺めていた公演のチラシに美しく描かれた禍々しい草花を頭のどこかで想起しながら。

パスは、ナサニエル・ホーソーンの短編 *Rappaccini's daughter* を脚色してこの戯曲を書き、ホーソーン自身はインド由来の、毒で育てられた美しい娘の逸話にヒントを得たという。パスは、戯曲化するにあたり、もとの短編にはなかったメッセンジャー (*el mensajero*) を登場させ、物語の進行を司ると同時に、詩的イメージに満ちた言葉を紡がせて、パス独自の観念的な詩的世界を伝える役割を担わせた。田尻氏の脚本は、このメッセンジャーの長い台詞の一部をコロスに言わせることで、よりわかりやすく、より動きのある舞台にしているといえるだろう。

名古屋を中心に活動している劇団クセックは、1980年設立以来、古今のスペイン語作家の作品を取り上げ、奇抜な演出と舞台装置、独特の肉体表現、個性的な役者をそろえて、独自の舞台世界を作ってきた。これまでの上演作では『人生は夢』、『ドン・キホーテ』、『ヌマンシア』、『ラ・セレスティーナ』、『フェンテ・オベフーナ』がスペインのアルマグロ国際古典演劇祭やアルメリーア黄金世紀演劇祭に招聘され、今年7月にはロペ・デ・ベガ原作の『ロマンス・愛と死～オルメドの騎士～』がオルメド古典演劇祭に招聘された。日本の演劇集団でこれほど継続的にスペイン語圏の戯曲を上演し、しかもその質の高さゆえにスペイン本国でも評価されているところは他にない。さて次回はどんな舞台で私たちを驚かせてくれるだろう。

(さいとう・あやこ 東京大学大学院総合文化研究科教授)

## 【国際学会報告1】

第2回イベロ・アジア・イスパニスタ会議 (II Congreso Ibero-Asiático de Hispanistas)

福嶋 教隆

この学会は、京都外国語大学とその協定校であるナバラ大学が中心となって主催し、2013年9月21～23日に京都外国語大学で開かれた。日西400周年の公式イベントの1つとして、在日スペイン大使館、セルバンテス文化センター東京などの協賛を得た。2010年にインドのデリーで開催された第1回大会に続くものである。

初日には、José Manuel Blecua スペイン王立学士院長による辞書編纂を論じた講演があり、また最終日には、Enrica Cancelliere パレルモ大学教授によるカルデロンの演劇に関する

講演があった。

3日にわたり 24 の部会に分かれて 80 を超える口頭発表が行なわれ、活発な質疑応答があった。発表者は、日本とスペイン語圏各国ばかりでなく、韓国、台湾、インド、オーストラリア、イギリス、フランス、イタリア、ノルウェー、ルーマニア、アイスランド、エジプト、セネガル、アメリカ、カナダ、ブラジルなど、世界各地から参加した。

発表は、エルナン・コルテスの書簡の研究で知られる Ángel Delgado Gómez 氏や、セルバンテス研究の泰斗 Edwin Williamson 氏、機能言語学で著名な Tomás Jiménez Juliá 氏、日本の古典芸能に精通した Fernando Cid Lucas 氏によるものなど、きわめて多彩で密度の高い内容であった。日本の研究者も多数、積極的に参加し、例えば、岡本信照氏が司会をつとめたスペイン・ルネサンス思想のパネルは大きな反響があった。個人的には、Antonio Gil de Carrasco 氏によるイスラム・スペイン詩についての発表に非常に啓蒙された。

このように本格的な国際学会を成功させるにあたって、尽力された坂東省次教授をはじめ開催校の教職員、学生の皆さんに、参加者の 1 人として感謝と称賛の言葉を贈り、この経験が今後、スペイン語圏文化に関する国際学会が我が国で開かれる際に生かされることを願っている。

(ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学教授)

## 【国際学会報告 2】

### II CONGRESO IBEROAMERICANO LEIBNIZ

“300 AÑOS DE LA MONADOLÓGIA”, Granada, 3-5 de Abril de 2014

木下 登

グラナダ大学を会場に開催されたイberoアメリカ・ライプニッツ学会は、スペイン語版『ライプニッツ著作集』が刊行中であることと、とりわけ 2014 年が近代ヨーロッパの構築に多大な影響を及ぼしたライプニッツの著作『モナドロジー』が出版されてから 300 年目にあたることを機縁としていた。学会には、スペイン語またはポルトガル語を母語とする国々の研究者だけでなく、ヨーロッパ、北米、アジアからの研究者も参加して、3 日間にわたり、ライプニッツとモナドロジー、ライプニッツによるアリストテレスの受容、ライプニッツと解釈学と現象学をはじめ 200 以上の研究発表が行われた。膨大なプログラムの詳細については、<http://leibniz.es/congresoiberoamericanoleibniz.htm> を参照。筆者は、Kitaro Nishida ante Leibniz –En torno a su estudio “Guiado por la armonía preestablecida hacia una filosofía de la religión”と題して、西田がライプニッツのモナドロジーを契機として仏教を軸とした独自の哲学の深化を図った一側面を論じた。

スペインでは、2007 年からライプニッツの哲学と科学に中心をおいた 20 巻におよぶ壮大なスペイン語版『ライプニッツ著作集』(Editorial Comares, Granada) の刊行が続いており、2013 年までに 7 巻が出版されている。スペイン語版『ライプニッツ著作集』についての情報は、<http://www.leibniz.es/> に詳しい。

(きのした・のぼる 南山大学教授)

### 【国際学会報告 3】

#### International Federation for Theatre Research

岡本 淳子

2014年7月28日から8月1日までイギリスの Warwick 大学で開催された International Federation for Theatre Research (演劇研究国際学会)に参加し、研究発表をした。当学会での発表は2013年のバルセロナ大会に続き二度目である。

バルセロナでは、“Lagacies of the Preceding Spanish Playwrights in the Works of Antonio Buero Vallejo” というタイトルでブエロ・バリエホ作品におけるバリエ＝インクランとロルカの影響について発表した。同席したのは、“Theatre to the People: Two Initiatives during Spain’s Second Republic” で発表したアメリカ人研究者と、“García Lorca in the Crossroads: La Barraca and Democratization in 1930s Spain”で発表したスペイン人研究者である。三名が扱う時代や作家が共通していたこともあり質疑応答が活発に行われた。基調講演の一つにロンドン大学クィーン・メアリー校のマリア・デルガド教授による“Garzón, Lorca, Almodóvar and the Performance of Memory in Spain”があり、内戦・独裁制後の記憶の回復がスペインの大きな課題であることを再認識した。

今年度の Warwick 大会には、前回の700余名を大きく上回る1000名以上が参加した。私は The Hapsburg Dynasty and the Franco Dictatorship: Double Layers of History in the Theatre of Antonio Buero Vallejo, *Las Meninas*” というタイトルで発表した。通常三名で1テーブルなのだが、組み合わせがうまくいかなかったのだろう、アイルランド演劇の研究者と二人だけであった。残念だったのは前述のデルガド教授の発表、“Politics, Nationhood and Recession: Staging la Crisis in Catalonia”が同時間帯で聴けなかったことである。当学会には世界各国から演劇関係者が集まるが、使用言語が英語ということもあるのだろうか、スペイン語圏からの参加者はそれほど多くない。チリの演劇のテーブルでは、司会者が聴衆にスペイン語がわかるかと尋ねた後、すべてをスペイン語で進行した。発表者がスペイン語の原稿を読んでいたところを見ると、元々英語で発表する気などなかったようだ。ルールなどお構いなしのラテン系の乗りには思わず頬が緩んだ。

日本からは20余名が参加したが、ほとんどが英米あるいは日本演劇の研究者であった。様々な国の演劇人たちとの出会いに加えて、異なる分野の日本人研究者と異国の地で交流することも、当国際学会の魅力である。

(おかもと・じゅんこ 大阪大学言語文化研究科言語社会専攻講師)

### 【国際学会報告 4】

2013年10月1日2日3日、東京のセルバンテス協会で行われました Congreso Internacional sobre el español y la cultura hispánica en Japón と la ALFAL (Asociación de Lingüística y Filología de América Latina)の報告は次の URL をご覧ください。

[http://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca\\_ele/publicaciones\\_centros/tokio\\_2013.htm](http://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/publicaciones_centros/tokio_2013.htm)

## 【『HISPANICA』 編集委員会より】

『HISPANICA』第59号の原稿を募集しています。

論文・研究ノート・書評を投稿規定に従い、2015年3月1日から31日のあいだに、ご投稿ください。

〔送付先〕

日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1丁目24-1 第2ユニオンビル4F

(株)ガリレオ学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

## 【編集後記】

定年になると、こんなに忙しくなるとは思いませんでした。定年前から抱えていた翻訳、科研費による現地調査、かかわっている劇団の名古屋・福井公演、3年ぶりのスペイン公演、・・・と、仕事がびっしり詰まり、会報の編集作業が思うように進みませんでした。個人的な理由で学会の仕事が大幅に遅れたことをまずお詫びいたします。早くから原稿をいただいた先生方に申し訳なく思います。平身低頭、陳謝いたします。

昨年の後半から今年の前半まで、日本スペイン交流400周年の事業が数々催されました。日本イスパニヤ学会はその組織委員としてこの一年の活動を担ってきました。皆様方のご協力により、無事その任を恙なく済ますことができました。お礼を申し上げますと同時にここにご報告いたします。

学会参加はもとより大会プログラムまでインターネットで配信する時代になりました。この『会報』、いつまで紙媒体として発行し続けることができるでしょうか。いまだにガラ系の携帯を使用している、というよりかそれしか使用できない人間にとっては、住みにくい世の中になりました。早く次の世代に役割をバトンタッチしたいと願っています。

(広報担当理事：田尻 陽一)